

向野堅一顕彰会会報 第三号

第3号

2012年3月31日

向野堅一記念館開館式典参加への御礼と報告	一頁
自分の将来をイメージすると	一頁
— 幼年学校生徒啓助の作文から —	二頁
秦巖(はたいわお)略伝	二頁
明治末期から大正前期の福岡の 小学校校舎について	七頁
向野堅一記念館の存在意義	十頁

向野堅一記念館開館式典参加への

御礼と報告

向野堅一顕彰会事務局

昨年(平成二十三年)三月五日の土曜日午後一時より、当記念館におきまして、開館記念式典を開催しました。地域の方々、直方市関係者、御一族、会員の方々に御参加いただき、まことに有難うございました。また、有志の方々より寄付金を賜りまして、理事一同、厚くお礼申し上げます。

今年度も記念館は、平成二十三年二月十六日に急逝しました初代会長・故向野鉄朗氏の遺志を継ぐべく研究活動を行っていきます。二代目会長に就任した大久保智弘理事の下、向野堅一顕彰会組織を再編することにいたしました。

なお、平成二十四年度前期開館は、三月一日から五月三十一日まで、後期開館は九月一日から十二月三十一日までです。開館曜日は木、金、土、日曜日、祝日です。また、九月十五日、十六日、十七日に「第一回向野堅一記念祭」を実施する予定です。

自分の将来をイメージすると

幼年学校生徒啓助の作文から

齊藤 太郎

「中学校に入れたら卒業して士官学校に入りたい」という希望を手作り雑誌『骨肉』(大正三年十一月号)に記していた小学生の啓助(向野堅一の四男)は、その五年後、陸軍熊本地方幼年学校に入学することになった。

修猷館に入り、中学校一年の課程を終えるところで陸軍幼年学校を受験、合格となったもので、陸軍士官学校、さらに陸軍大学校へと進む陸軍将校のエリートコースとしては、幼年学校入学から始める方が正系といえた。



向野堅一四男・向野啓助
(1905 1937)

啓助の選択は、一見、まわり道をしたようだが、そうではない。中学校第一学年修業の程度の入学試験を課した幼年学校の制度に応じたもので、啓助のような例は、珍しいことではなかった。

父・堅一は、啓助の軍人志望について、どのように思っていたのか。もしかしたら承知しないのではないかと、啓助が子ども心に心配した時期もあったようだが、幼年学校受験の時には志望に迷いは見られない。

陸軍熊本地方幼年学校生徒として、啓助がどのような成長を遂げていくのか。将来の活躍が期待されていた陸軍将校の形成の道程という点からも、また、(博多と熊本では、そう離れているとはいえないにしても)親兄弟と別れて寮生活を送ることになる十代の少年の自己形成という点からも関心をそそられる。例えば、啓助について、外見上は申し分のない将校の卵としての行状を見せていたとしても、その内面において、大正期の青年らしい不安や悩みといったものと無縁というわけではなかった、ということとは考えられないか。

幼年学校生活を送る啓助の内面をうかがわせる資料を一つ見てみよう。

幼年学校の教科には「作文」の時間が設けられていて、題目は予め定められた、いわゆる課題作文が主になっていた。課題にしたがって書かれた作文は担当教官に提出され、評言・添削等が加えられ生徒に返された。「作文用紙 陸軍」と印刷された原稿用紙に書かれた啓助の作文等を綴じた『作文手簿』（記念館保管）が残されている。その中から一つを抜き出してみる。

題目は、「今後二十年間ニ於ケル吾輩ノ境遇ヲ想像ス」。―幼年学校生活も終わりに近く、今後二〇年をどうイメージするか。陸軍将校としての自分の能力、可能性について、どれほどの自覚を持っているか、書くことになる。

啓助生徒の書いた将来展望。

「今ヨリ、約五年ニシテ之ノ石頭ノ余モ帝国ノ一軍人タルヲ得タリ。歩兵第〇〇聯隊付トナリ、精勤五年余又中尉ニ昇進セリ。而シテ、其後精励数年ナレドモ昇ラズ。一心ニ軍務ニ務メタレドモ依然トシテ中尉ナリ。大学モ二度三度受クルハ受ケタリ、成績ハ云ハヌガ花ナリ。仰ギテ我が幼年学校時代同期ヲ見レバ胸ニハ天保銭肩ニハ参謀肩章、実ニ英姿颯爽タル好将校トナレリ。我ヲ見レバ、頭ニハ数年前ノ古帽子、身ニハ幾度ノ演習ニヨゴレタル軍服、勲章トテハ記念賞唯一ツ実ニ見ヨキモノニアラズ。カクノ如クシテ中尉ノ職ニ居ル事十年遂ニ『ヤット

コ』大尉トナリタリ。今何々聯隊第〇〇中隊ノ中隊長トシテ何時切ラル、カヲ心配シツ、モ兵ノ訓練ニ怠リナシ。」

いかにもエリートコースから外れた凡々たる将校といった将来の姿。こういう作文を提出することができた当時の幼年学校の教育方針も注目されるが、まずは、これを書いた啓助を問題にすべきだろう。一見ユーモアのある文章に何を発見することができる。自分に自信の持てない者の自嘲。そうと見せかけて、平凡な他者を批判した皮肉。出世栄達を旨とする秀才に背を向けた生き方の表明：どうとも読める。これを手がかりとして啓助の心に近づくこともできるのではないか。

(平成二十三年七月八日受理・元筑波大学教授)

秦巖 (はたいわお) 略伝

本多寛尚

一・明治三年以後

秦巖 (はたいわお、一八三三〜一九一五) は、明治三年、新入村 (しんにゅう、現福岡県直方市下新入) に私塾を開塾し、漢学の高等教育を施した人である。塾名は「明善塾」「明善義塾」「秦塾」などと呼称されるものの、正式名称は不明。向野齊や向野堅一らも秦巖に学び、師の偉徳を眞照寺 (新入) 境内の石碑に刻み、恒久に伝えたことよって、明治政府による教



育が本格化する以前の、直方地域における近代教育の先駆けとして必ず取り上げられている。換言すれば、民間人の力で高等教育が開された具体的な事例

である。しかも、この不安定な時期に基礎教育を展開していた仲間、すなわち北村俊平と山名聴説のことが、秦巖によって伝えられている。『福岡縣碑誌(筑前之部)』から「秦巖碑銘」を引用し、『感田小学校百年史』の記載を併記して、改めて秦巖を紹介したい。

「秦巖碑銘」

先生姓秦、名巖、號夜雨、豊前小倉藩人、幼性好學、秉性高尚、不願屈膝于王侯、故不繼父後、出家参禅、遂視家於二梵刹矣、後讀詩興感於青者我、飄然還俗、脱袈裟着儒衣、明治初年、應青柳氏請來我邑、開家塾、以教授徒、筑豊之間、青衿子弟、負笈及門者日相踵、絃誦不絶、晚移居於錦川西涯、悠々自適、以樂老、大正四年十二月廿九日、以病歿、葬眞照寺、時年八十三、絶命詞云、來无來處、去无去攸、正真面目、山高水流、亦可以見其澹懷矣、余嘗受教於先生、舊恩不可忘、乃建石爲墓、獻香資百金、囑僧永代追薦、有詩代銘、曰、墓門或恐趁年荒、誰汲清泉誰燒香、長爲先師託追薦、春花秋草莫相

忘 大正十三年甲子九月 門人向野齊撰并書

（意訳）先生は、姓を秦、名を巖。夜雨と号した。豊前小倉藩の人で、幼少のころから学問に感心があり、生まれつき高潔な性格で、仕官を願わず家督をも継がず、出家参禅して、ついに二つの寺院に住職するに至った。しかし、『詩経』を通じて教育を志すようになり、とたんに還俗（出家を辞）し、袈裟に代えて儒衣を着るようになった。そして明治初年、青柳氏の要請に応じてこの新入村に来て私塾を開設して教鞭をとり、志しある者は遠くからも入門し、大勢が学んだ。後、居宅を錦川の西側に移して、悠々自適な老後を楽しんだが、病気のため大正四年十二月二十九日に亡くなられたので、真照寺に葬った。八十三歳だった。絶命の詞として「来るに來るところ無く、去るに去るところ無し。まさに真の面目。山高く水流るる」と遺っており、その深淵な境地が想いはかれよう。私は、かつてその教を親しく受けており、その感謝の思いは少しも薄らぐものではない。そこで、石碑を建立して墓とし、あらかじめ布施を寺へ納め、永代に亘る追善供養を頼んだ。最後に、次の詩をもって銘に代えたい。「墓門或は恐る、年を趁うて荒むことを。誰か清泉を汲み誰か香を焼かん。長へに先師の爲に追薦を託す。春花秋草相忘ることなかれ。」大正十三年甲子九月 門人向野齊撰并書

この石碑がある眞照寺と秦家とに現在、寺檀関係は無い。額字は京都建仁寺の住職・竹田黙雷禅師による。撰者・向野齊（ひとし、堅一の兄『舊新入村誌』六五〜六六頁）は、四期つとめた新入村村長の一期目であった（前掲『新入小学校百年史』一七四頁）。

秦巖の経歴の由来は、基本的にこの向野齊撰文『秦巖碑』に依拠する。『感田小学校百年史』『福岡県教育百年史』がさらに詳しいので、そのまま引用する。

「明治三年新入村の豪農青柳丈一郎始め有志者の招請に応じ漢学塾を開き、明善齋と名づけ塾長を勤むること三十有余年、筑前四郡の医師、僧侶、神官、有志者の子弟その門に学ばざるはなしといわれた秦巖は豊前小倉藩の士、大儒佐藤一斎に学び学成るも藩侯に仕えるを好まず、出家参禅したが、王政維新後は儒に復し詩文を娯とした。「明善学校」は小学中等科を終わつた者を入学許可し、入学束脩金五〇銭、月謝三〇銭、四ヶ年をもつて卒業。凡そ三〇年間四書五経、史書、文学の講筵に生涯を捧げた。頓野村感田村からも笈を負う者が多く私塾として名声が高かつたのである。その秦先生が明治一〇年から一一年まで感田校第二代の校長を勤められたのも奇しき因縁だったと思う。感田村戸長香月新三郎の膝を屈し頭を垂れての三顧の礼に応えられたものか。明治六年香月新三郎は感田村副戸長を拝命するや、翌七年感田小学校の移転新築にも意をそそぎ、当時 鞍手郡屈指の校舎を建てたのである。」

これらの文面によって、秦巖のおおよそは理解できる。ただし明治二年（一八六九）前の記述は無い。本人の著述もなく、秦巖による碑文のみが伝えられている模様である。書籍において、

「山名聴説碑」「阿部慶藏君紀年碑」の全文を掲載した資料は見出せなかった。「阿部慶藏君紀年碑銘」については稿を改め、ここでは随専寺の「山名聴説碑銘」（後學秦巖謹撰、山名徳海恭書）を翻刻する。

「山名頂雪翁碑銘」

翁者以文化八辛未之年而生實靈生院□□之嗣子也弱冠以來究悉韻學儒術其他事跡不暇枚舉也五十二歲傳法于嫡嗣徳海而直號采霞以滑稽爲己娯當王政維新之際偶應科舉爲小學校師教授生徒七年矣其爲人也和以接人敬以執事以故鄉人稱翁不名特以長臨池執弟子之禮學徒者凡三百餘人就中若干名以健壽碑聊報浩恩曰翁々未應日縱令死而有知孰與生而得面見之乎翁遂領焉時明治二十年歲七十七翁猶聰明矍鑠由是觀之則焉知非躋百歲哉銘曰壽則不藝藝則不壽能兼壽藝誰與翁偶 後學秦巖謹撰、山名徳海恭書

（意訳）頂雪（聴説）翁は文化八（一八一）年、靈生院□□の嗣子として生まれた。二十歳をむかえ、仏教と儒教その他、広く究学し、五十二歳になって、嫡子である徳海に事物を譲り、「采霞」と号し、俳句を楽しんで暮らしていた。明治になって、小学校教師として七年になる。その人格は和をもって人に接し、敬をもって事にあたるを心していた。このためか、地元の人々はこの翁について特別な扱いはしなかったが、書に優れていて弟子はおおよそ三百人あまり。その内の志し有るもの数名が、健壽を祈念して石碑を建立し、報恩の気持ちを表そうとした。しか

し翁はこれを許さなかった。そこで、「元気なうちに、見ることが出来ようから。」と説得したところ、とうとう容認した。明治二十年、翁は七十七歳で、なお聡明にして矍鑠としている。この様子ならば、おおよそ百歳までの長寿であろう。「壽は則はち藝にあらず。藝は則はち壽にあらず。よく壽藝を兼ねるに、誰れか翁と偶せん。」と銘す。後學秦巖謹撰、山名徳海恭書。

池上山随専寺は直方市山部にある浄土宗寺院。本堂にかかる山号額「池上山」は、山名聽說八十六歳時の揮毫。「山名聽說」「頂雪」の落款印が見える。石碑は、台座を含めて四個の自然石からなり、高さおよそ二メートル。ちょうど毛筆を立てたような形状で、御住職の説明で硯や机台がデザインされていることを知った。正面には「見身山十世」「前聞名院聽說法印塔」と刻まれ、その背面に秦巖撰文によるこの銘文がある。(なお、原文の「焉知非躋百歳哉」は、『淮南子』「塞翁失馬、焉知非福(塞翁馬を失う、いづくんぞ福にあらざるを知らん)」を参考に読み下した。『(統、直方むかしばなし)直方碑物語』が「采霞(さいか)」とする俳号は「采霞」の誤植と思われる。)

『直方南小学校百年史』(一六〇―一七頁)は、山名聽說について直方市古町(現在の新明治町)の聞名院住職であったと述べ、山名聽說が開いていた寺子屋が「よみ、かき」であり天保十年(一八三九)から明治五年(一八七二)までの足かけ三十四年も続いたことを伝え、石碑からの判読

が困難な台座の字句、つまり壽碑建設の世話人らの名前をも伝えている。

二. 明治二年以前

秦巖が所蔵した書籍は、その多くが向野睦祐に譲られ、現在、向野文庫(平成二十二年以来、所蔵が向野堅一記念館へ移行)と呼ぶ中に瓢箪型の印影「秦家蔵書」を多く見かける。その中に、写本『遠帆樓詩集』がある。著者は蔵春園の塾長・恒遠醒窓(一八〇三―一八六二)、刊行は弘化五年(一八四八)。拙論「向野文庫所収写本『遠帆樓詩集』」で当該写本を紹介(『淡窓研究会会報』第四号、二〇〇九年)し、版下原稿と見て重要視している点と、白く塗りつぶされた三種の印影「下村蔵書」「下村陋」「維羅」(判読を維羅と改める)を報告したところ、特に「下村」に対する向野康江氏の反応は早く、「下村といえは下村源次郎。追跡調査を」という展開になった。向野氏の先行調査で、すでに秦巖は旧姓が下村であることが判明していたのである。

押印の時期は、版本の発刊年まで遡って差し支えなからう。そして、これらを塗りつぶす時がくる。所有が下村から秦へと変わるの、おそらく明治三年(一八七〇)、秦巖が、小倉藩領から移住し私塾を開いた時であろう。

移住先は、新入村七〇番地(下新入七〇番地)で、新人大橋の東岸あたり。度々の浸水で移転したそうだが年次は不明。『新入小学校百年史』

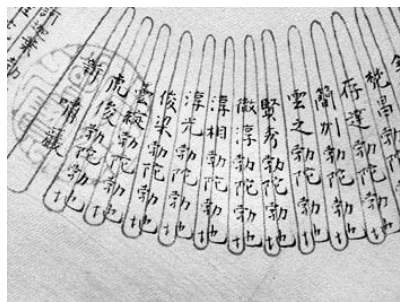


(一六九頁)で、明治二年、同十六年、十七年、二十四年、三十八年の大洪水を知るまでである。

また、戸籍によると、天保四年(一八三二)十月十日生まれとある。この時点で「下村」を押印したのは、巖では

ないと考えたい。刊行時期の巖は十六歳。蔵書印は捺せまいし、ましてや書写本に手を加えることもなからう。また、戸籍は「福岡縣企救郡東小倉裏門筋下村源次郎亡長男秦家絶家再興」、身分は「平民」と記すが、これは解読し難い。拙論筆者は、具体的に養子や継承という表現が無い点と、「再興」と述べる一方でその事情は皆無なので、「福岡縣企救郡東小倉裏門筋(に住した)士族下村源次郎が亡くなり、(その)長男(巖)は、秦家(となって、その)絶家(せるを)再興す」と解釈した。

先祖下村家は士族、小笠原家の家臣で明石の出だとのこと。小倉藩小笠原家の初代は忠真。信濃国松本藩第二代藩主で、播磨国明石藩主を経て豊前国小倉藩に入った。下村家が小笠原家の明石時代以来の家臣であることが予想できるが、過去帳にはこれらの記事は伝わらず、筆頭が秦巖。秦巖自身は大正四年(一九一五)十二月二十九日に死去。享年八十三。「道林院閑譽夜雨幽巖禪定門」と諡号されている。



戸籍や過去帳のほか、秦家には貴重な物が伝わっている。嗣書(絹本、梅花飛紋の綾)・大事(絹本)・血脈(絹本)、総じて三物と呼ばれ、道元に伝わった仏法が師僧から自分へと継承された証明書。日本曹洞宗の正式な僧侶のみが所有できる個々固有のもので、実は秘伝にして非公開が前提、滅多に他見は適わない。この遺品がもたらす情報は大きく、秦巖がかつて嘯巖と名乗った曹洞宗の僧侶であつて、本師が宗玄寺住職・虎俊和尚、認可の期日が安政七年(一八六〇)庚申二月五日だとわかる。これを『曹洞宗全書』「大系譜」に照らしたところ、同書五七九頁に掲載があり、宗玄寺は小倉、その第十八世住職・嘯山虎俊と弟子・嘯巖虎班だと判明し、さらに、前掲「秦巖」の「遂視篆於二梵刹矣」は、安全寺(当時は古船場町、十七世)と玉泉寺(企救郡畑村、二十五世)のことであり、安政

七年(一八六〇)年以降のことだとわかった。弟子(大震雷音和尚)もあり、『龍福山玉泉寺文献雑考』所収「企救郡社寺堂庵帳(明治二年)(四頁)」に「当巴三拾七歳、住持、嘯巖」二十歳、弟子、道輪」ともある。『龍福山玉泉寺文

献雑考』と『(復刻)企救郡誌』は、玉泉寺の紹介に友石慈亭と友石古香の漢詩を紹介する(第九章寺院)。慈亭は企救郡畑村の大庄屋。矢島伊濱(いひん、藩校思永館学頭)に学んだ秀才で、七言絶句「春日遊玉泉寺」と七言律詩「遊玉泉寺」二句、合計三句が挙げられ、その長男が古香で、五言律詩「至玉泉寺呈嘯巖禪師」が有る。四男・延之助盛郊(惕堂)は玉泉寺に石碑が立つ。

友石家父子は学識が高く、交友も水哉園、蔵春園、咸宜園、長三洲や劉石秋(『遠帆楼詩集』では石舟)、草場佩川や藤本鐵石らと親しかったことが伝えられているので、嘯巖虎班あるいは下村家は、友石家を介して、近隣の儒学者諸師とも親しく交際できたのではなからうか。

三、論考

拙論筆者は、巖の父が下村源次郎で「陋」「維罷」はその号と考える。仮に、巖による捺印の可能性を考えても、巖が下村姓を名乗れたのは、出家するまでのことで、これを含む学業期としても十代の後半まで。若い学生が号を名乗り印鑑を使うとは考えにくい。

一方で、これらの印影を消去でき、秦の印を捺せる人は、版下原稿の価値がわかり、その所蔵の由来を知る人物である。巖がその人だとすれば、その学問への眼差しは、実は父の影響、父の交友関係(友石家や曹洞宗僧侶)からの影響

によるものと言えよう。

下村家は上級藩士であつたと思われる。小笠原家の位牌を祀る宗玄寺に深く関与できる位置に居ることと、黄檗宗廣壽山福聚寺の古い灯笼にも「下村」の名が見えるなど、とても下級藩士とは考えられない。そして下村姓と秦姓とに歴史的根拠は無いであろう。

勉学の基礎は藩校において培われ、曹洞宗に学んだと考えられる。師を佐藤一斎と記述する活字資料もあるが、略年表から推し量るに、下村巖の学業期(一八四六)が佐藤一斎にとつては昌平黌の儒官(総長に相当)の頃で、全く現実味が無い。また、昌平黌入門者名簿「升堂記」にも該当する名は無い。仮に、江戸で学林に学んだとすれば、駒込の吉祥寺(文京区本駒込三丁目)の学林「旃檀林」(駒澤大学の前身とされ昌平黌に近い)或いは芝の青松寺「獅子窟」か、高輪の泉岳寺であろう。

小倉の藩校思永館は、表門から入った左右に柔剣道の道場があり、ここを抜けた先に「明善門」が置かれ藩儒石川正恒麟洲(一七〇七〜一七五九)の筆による額「明善」が掛かり、その奥に文学教場があつた(『北九州市史』近世編、平成二年、一〇九頁)。秦塾が明善黌とか明善義塾と呼ばれたのは、これに由来するかもしれない。巖が秦を名乗るのは明治三年(一八七〇)からであろう。改姓の理由に確かな裏付けは出来ないが、明治維新に際し、門司の畑(はた)村を

離れ新入村へ移住するとき、身分は公表し、家名と現職といった素性の半分は隠し、新生活を支えてくれる協力者諸氏に余計な迷惑が及ばないよう工夫したのではないか。廃仏毀釈の乱世であった。石碑の詩偈から推測すると、明治維新の折、致し方なく還俗したと思われる。

巖は、企救郡畑村から「秦」を名乗り、小倉の東側で裏門司と呼ばれる地域にあたることから、戸籍の表現を得たのではないかと想像され、下村巖・嘯巖虎班の居場所は、誰にもわからなかったに違いない。

戸籍は、明治三十一年式戸籍の登記と思われる。これは、「家制度」が定められ、戸籍簿の他に「身分登記簿」制度を設け、申告事項を戸籍簿に書き写す手法を用いたという。例えば「秦家」と書いて「絶家」と注記したのではないか。しかしその意図が酌みならず、注記した「絶家」が本文として書き写されたため、戸籍の意味するところが理解しにくくなったのではないだろうか。仮に、秦家の再興ならば、その経緯をなるべく詳細に残したであろうが、戸籍の記述を見る限り、そこへの興味は皆無である。

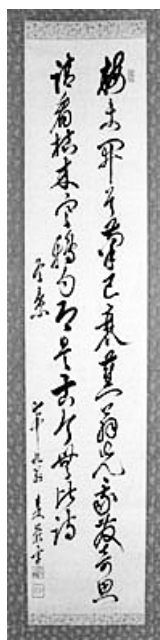
号の「夜雨」は、『大漢和』が「夜雨」に「夜雨巖」なる巖の名を紹介している。この事を早川太基氏に問うたところ、『大漢和』の示唆こそ稀少な例の掲載で窮めて弱い線だとの教示を得た。「夜雨」は「夜雨対床」を想起するもので、『大漢和』は、夜雨の音を聞きながら寝

台を並べて寝ていること。兄弟あるいは親友などの親しさを表す語。その原典として東坡居士蘇軾(一〇三六〜一一〇一)の詩「東府雨中別子由」の詩句「対牀定悠悠、夜雨今蕭瑟」を紹介している。岩波文庫『蘇東坡詩選』(二六五頁)の註に従うと、「夜雨対床」ないし蘇軾の詩句は韋應物(七三六頃〜七九一頃)の詩「示全真元常」に基づくと解説している(岩波文庫同書二三頁)。ただし、『全唐詩』等は「風雨」を「風雪」で伝え、これについて早川氏は、蘇軾が韋應物の詩句を好んだと述べる『詩林広記』後集卷四引用の「王方直詩話」が「風雨」としているという。「示全真元常」の詩は親友との出会いを喜ぶもので、蘇軾はこれを承け、弟としみじみ語り合いたい願望を詠んだという。「夜雨」が指し示すのは、咸宜園の夜雨寮ならば学友が仲睦まじく切磋琢磨して暮らす姿であろうし、個人の号ならば、仲間への追慕であり再会の喜びであり、克己復礼であったかと思う。

秦巖の時代への眼差しは「北村俊平碑」に見られ、「明治初年、國家多端にして、内訌外患、踵を接で起り、朝野の人士、東走西奔、寧處するに違あらず、焚を拯ひ溺を援くるに汲々たるも、猶ほ及ばざらんことを恐る。しかのみならず、舊事殆ど革まり、新制未だ完からず、子弟の其の方向に迷ふ者多からずとなさず。是れに先んじて、翁、習字を授くるをもつて己れが職務となす。是に至り學校教員たるに逮び、慷慨

奮起、訓誨指畫、勤めて子弟をして其の歸趣を謬らざらしむ(原漢文)」であった。

そして後半生については、向野齊が「絶命詞」つまり「遺偈」を刻むという重要な役割を果たしている。遺偈とは、禅僧が入滅に際して残す遺誠偈頌のことで、悟りの境涯や辞世の語句が表現される。秦巖の場合は「來無來處、去無去攸。正眞面目、山高水流。(來るに來る處なく、去るに去る攸なし。正に眞面目。山は高くして、水は流れり)」と伝えられている。おそらく『梵網經合註』卷一の「又未生無藏處。欲生無來處。正生無住處。生已無去處。則法性本無染汚也。(また、未だ生ぜざるも藏るところ無く、生ぜん欲せども來たるところ無く、まさに生ずるも住するところなく、生おわりて去るところ無し。すなはち、法性もとより染汚なし)」を用い、福知山系と犬鳴川を常套句「山高水深」「山高水低」に乗せた表現であろう。秦巖が最期まで、仏教者であったことの証である。



秦巖は、波乱の時代に、世間が求める身分と姓名と経歴は失った。しかしながら、誰も奪うことが出来ない菩提心を発し続け、人々の情操を育んだ後半生は、むしろ尊い時空であったというべきではなからうか。僭越ながら、優秀にして沈着冷静な人物であったと思われるならず、この高潔な先哲を顕彰することは、郷土史はもとより、曹洞宗史上、あるいは宗教史の面からも大切であろうと考える。

【関係略年表】(人物を特定しない部分は巖の記事)
 天保四年(一八三三) 十月十日に誕生。
 弘化三年(一八四六) 十四歳、思永館に入門？
 弘化五年 『遠帆楼詩集』刊行。
 安政五年(一八五八) 友石慈亭、六十歳で死去。
 安政七年 嘯山虎俊に嗣法。二十八歳。
 慶応二年(一八六六) 宗玄寺、丙寅動乱で焼失か？
 明治元年(一八六八) 三十六歳。正月十日、師僧・嘯山虎俊示寂。神仏分離令(三月)
 明治二年 玉泉寺に住持せる記録あり(企救郡社寺堂庵帳)。
 明治三年 三十八歳、新入村に移住、開塾。
 明治八年 友石古香、五十一歳で死去。
 明治十年 四十五歳、感田尋常小学校長(三月三十一日から一年間)。
 明治十四年 四十九歳。子息・功の誕生(七月)。
 明治二十年 「山名頂雪碑」、五十五歳。山名は七十七歳。
 明治二十一年 友石惕堂、五十二歳で死去。
 明治二十七年 日清戦争が勃発(七月)。
 明治三十一年 新戸籍法の施行(七月十六日)。

「北村俊平碑」(十一月十五日以降か？)
 明治三十四年 「阿部慶藏君記念碑」(二月)。
 明治三十七年 日露戦争が勃発(二月)。
 明治三十九年 「岡森堰再築碑」(三月、七十三歳)。
 明治四十二年 「國寶十一面觀世音碑」(三月、七十七歳)。
 大正四年(一九一五) 十二月二十五日、妻トク死去、享年五十九。十二月二十九日、巖死去。八十三歳。

【関連文献】

- ・『舊新入村誌』(筑豊之實業社、昭和三年、五五頁) : 善行者(名士)
- ・『福岡縣碑誌(筑前之部)』(福岡縣碑誌保存會・筑紫史談會 大道學館出版部 昭和四年) : 撰文(三例)と「秦巖碑」を掲載。
- ・『鞍手郡誌』(鞍手郡教育會昭和九年初版、昭和六十一年復刻) : 第八章教育(よ) 感田尋常小學校(一一二五頁)、第十八章人物の六(一一五七四頁)。
- ・『直方市史』下巻(直方市史編纂委員會昭和四十六年) : 第四章教育、第一節学校教育
- ・『新入小学校百年史』(昭和四十八年、一七七頁)
- ・『感田小学校百年史』(昭和四十九年、七七八頁)
- ・『福岡県教育百年史』(福岡県教育委員會編集、昭和五十二年)
- ・『続、直方むかしばなし』直方碑物語(舌間信夫、昭和六十年、直方市) : 秦巖の撰文「山名聰説碑」「阿部慶藏君紀年碑」を紹介。
- ・『直方の歴史と文化財』(直方ライオンズクラブ五十周年実行委員会、平成二十年、九一頁)
- ・『篆刻家石癖伝』(栗田藤平、櫻の森通信社、平成十二年。初出、昭和六十一年『九州作家』八七号)(平成二十三年六月一日受理・瑞石寺住職)

特別寄稿

明治末期から大正前期の福岡の
小学校校舎について

米川千恵子

一. はじめに

近年の『骨肉』研究によって、向野堅一の家庭教育や、大正期の向野家の子どもたちの様子が徐々に明らかになってきた。一方で、その子どもたちが通った当時の福岡県の小学校の様子についてはまだ知られていないことが多い。そこで本稿では、『骨肉』が作られた頃の子どもたちに影響を与えたであろう明治末期から大正期の福岡の小学校の校舎を中心にして様子を明らかにしていこう。

二. 平面図の分析

本稿では小学校の平面図を調査対象とした。期間が明治末期から大正初期(明治四十年から大正七年)、場所は福岡県という条件で探した結果、該当する小学校の平面図を十七校、二十二図分入手することができた。

- ① 真崎小学校(明治四十年(一九〇七)) 田川郡川崎町
- ② I 波多江小学校(明治四十年) 糸島郡前川町
- ② II 波多江小学校(大正五年(一九一六)) 糸島郡前川町
- ③ 壱岐小学校(明治四十一年) 福岡市西区

- ④ 小石原小学校(明治四十三年)朝倉郡東峰町
 - ⑤ I 川崎小学校(明治四十三年)田川郡川崎町
 - ⑤ II 東川崎尋常小学校(大正五年)田川郡川崎町
 - ⑥ 内浦小学校(明治四十四年)遠賀郡岡垣町
 - ⑦ 大刀洗小学校(明治四十五年)大刀洗町
 - ⑧ I 吉川小学校(明治四十五年)鞍手郡若宮町
 - ⑧ II 脇田尋常小学校(明治四十五年)鞍手郡若宮町
 - ⑨ I 三河小学校(大正四年)八女市
 - ⑨ II 三河小学校(大正一二年)八女市
 - ⑩ I 杵小学校(大正五年)遠賀郡水巻町
 - ⑩ II 杵小学校(大正九年)遠賀郡水巻町
 - ⑪ 直方南小学校(大正五年)直方市
 - ⑫ 立岩小学校(大正七年)飯塚市
 - ⑬ 千代小学校(大正七年)博多区東公園
 - ⑭ 田代小学校(大正初期)黒木町
 - ⑮ 雷山小学校(大正期)糸島郡前原町
 - ⑯ 感田小学校(大正期)直方市感田
 - ⑰ 岬小学校(大正期)宗像郡玄海町
- これを、施設の割当を元に数値化したものが次の表 1 になる。
- 表 1 に示されていない設備としては、まず、②(波多江小)の敷地内に役場、駐屯所、民家がある。このような例は全国的に見ても決して珍しいものではなく、畳敷きで比較的広い傾向のあった裁縫室で町の集会が行われるなど、かつての小学校校舎は地域に密着した存在であった。⑧ II (脇田尋常小)では村立図書館が校

表 1

	普通教室	職員室	校長室	安室	裁縫室	理科室	音楽室	講堂	小使室	宿直室	応対室	物置	教員宅	家事室	足洗場	保健室
①	六	一		一						一						
② I	六	一		一	一											
② II	七	一	一	一	一			一	〇五	〇五						
③	六	一			一							一		一		
④	三	一			一							二				
⑤ I	一四	一			一					一			一			
⑤ II	四												一			
⑥	七	一														
⑦	一四	一			一			一	一	一	一					
⑧ I	八		一		一			一	一			一		一		
⑧ II	四	一	一							一		一		一		
⑨ I	一一								一	一		一				
⑨ II	一一				一	一			一	一						
⑩ I	八	一														
⑩ II	一〇	一														
⑪	一九	一	一		一	一	一	一	一	一			一	一	一	
⑫	一九	一		一		一		一	一	一		二			一	
⑬	二〇	二		一				一	一	一		二	一	一	一	
⑭	二	〇五			〇五								一			
⑮	九	〇五			〇五	〇五	〇五		一	一	一	三		一		
⑯	一一	一							一			一		一		一
⑰	六	一			一	一				一						一

出典 各校の記念誌(作成 米川)
名称別ではなく用 別に分 した(例 校務室 事務室 を 職員室 にまとめる
など) 〇.五は兼用教室を表す

舎の一角に併設してあった。この他、⑫(立岩小)には売店、池、ブランコ、滑り台、⑯(感田小)には鉄棒、砂場などが確認できた。⑪(直方南小)には、表 1 の特別教室の他に図工室があった。しかし、この時期に図画工作科はなかったため、図画工作科の前身となった図画科か

手工科の特別教室、あるいはその兼用教室であった可能性が考えられる。このように、直方市や飯塚市の小学校で、遊具などが充実していたことがわかった。なお、⑮(雷山小)の内訳は職員・裁縫室と、理科・唱歌室である。表 1 を見ていくと、まず、最も備えられてい

る教室は普通教室、次いで職員室であったことがわかる。職員室以外にも宿直室、教員宅、小使室(使丁室ともいう。現在の用務員室のようなものである)など、大人のための部屋が用意されている小学校がほとんどである。最低限の設備として、子どものための教室だけでなく、大人のための部屋も考えられていたことが読み取れる。

最も多かった特別教室は裁縫室である。平面図上では「職員室」と記載されている場合でも、記念誌中の文章から実際は職員室兼裁縫室であることがわかった。よって、裁縫室は、実際はもっと多かった可能性もある。その他の特別教室としては、しばしば理科室が設けられていたことがわかる。兼用でない音楽室があるのは、図工室を有する⑪(直方南小)のみであった。

三. 校舎格差について

表1を見ると、教室が二つだけの学校もあれば、特別教室と合わせて二十以上の教室がある学校もある。また、数値には表れていないものの、学校のつくりそのものにも差があった。たとえば藁葺き屋根から木造二階建て等々(ちなみに、公立小学校として最初の鉄筋コンクリート校舎が登場するのは大正九年(一九二〇)以降)。小規模の学校について、⑭(田代小)を卒業した入江千代香氏は「複々式でしたので、一人の先生が三組もの生徒を受持たれ(田代小学校創立百周年記念誌編集委員会『田代のあゆみ』へ田代小学校創

立百周年記念事業実行委員会、昭和五十二年(四八頁)」や「私たちが入学しました大正六年(一九一七)は、二つの教室に職員室兼裁縫室が一つありました。堤石雄訓導兼校長と山下先生のお二人の先生でしたが、校長先生は校庭の角におった住宅にお住まいでした(同、四八頁)」と、一つの教室で三組を教えていた授業形態や校舎の様子を伝えている。

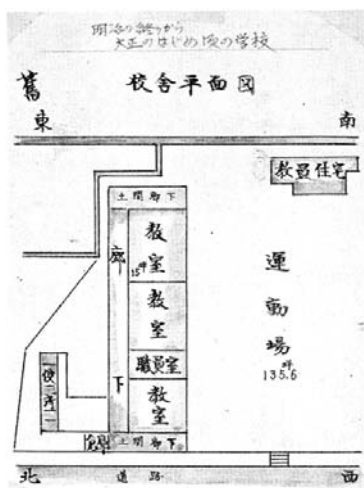


図1 大正初期の田代小学校

また、校舎の活用方法を工夫していた例に⑮(雷山小)がある。同校記念誌によると、「校舎は現在の運動場にE形に、東西の列三棟が建ちならび、一番南の列東側二教室が、高等科一、二年の教室であった時代がある。先ず校門をはいるとすぐに、玄関があり、左右に職員室や裁縫室、理科の教材室、宿直室等がならび、その裏側に校舎が三列ならんでいた。当時は講堂がなく、中央の校舎は中かべが取りはずしできる

ようになって、二教室を一つにして、講堂として使われていた。この教室を使用していた組は、他の学年にくらべて人数の多い学年が男女別に、授業をうけ、先生の病気で欠員になると、男女が一緒になることもあった(雷山小学校百周年記念会『雷山』、雷山小学校百周年記念会、昭和五十一年(一九七六)一四頁、一五頁)」と、高等科の教室が併設してあったこと、特別教室を兼用していたこと、壁が外せる教室を講堂として使用していたことなどが伝えられている。

これらのことから、福岡県内でも校舎の設備に関して学校によって差が大きかったことがわかる。

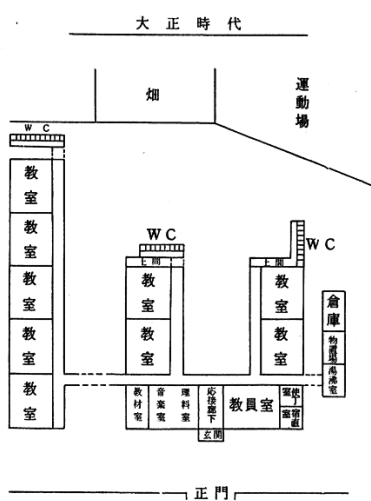


図2 大正期の雷山小学校

また、今回取り扱った十七の小学校の位置は、図3のようになる。当時の場所が不明なもの、現在地で示している。

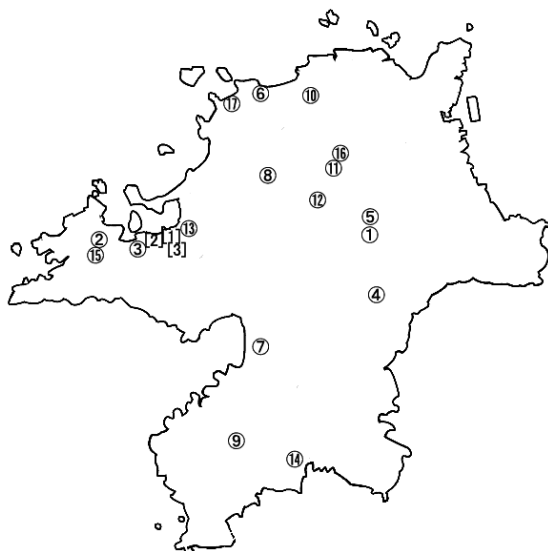


図3 各校のおよその位置(米川作成)

図3と表1を照らし合わせてみると、②③⑬⑮など、古くから商業都市として栄えていた博多周辺や、⑧⑪⑫⑯など、炭鉱で一躍経済が活性化した地域に、設備の充実した小学校があったことがわかる。この時期の校舎建設費が、地方自治体や寄付金によって賄われていたことが、原因の一つになっているのではないかと考えられる。なお、向野堅一も、学校に対して寄付金を寄せていた一人で、大正七年(一九一八)に修猷館に対して、三円の寄付をしていた記録がある。これはこの年度において二番目に多い金額であった。

四. 向野家の子どもたちが通った小学校

図3内の「1」は、啓助が通った大名小学校(福

岡市中央区大名二丁目六一一)、「2」は有二が通った赤坂小学校(福岡県福岡市中央区赤坂二丁目五一二〇)、「3」は晋が通った住吉小学校(福岡県福岡市博多区住吉四丁目一八一二)である。各校のこの時期の図面は残されていないので推察の域を出ないが、都市部に位置していたことや、近くにある⑬(千代小)の規模が大きいことから、「1」「2」「3」は福岡の中でも比較的设备が充実した学校であったのではないだろうか。ただし、「2」(波多江小)と⑮(雷山小)、「1」(直方南小)と⑯(感田小)のように場所が近く設備の規模も同程度という例もあるけれども、田川郡川崎町の①、⑤Ⅰ、⑤Ⅱのように近くにあっても設備の規模が異なる学校もあるから、一概には言い切れない。

五. おわりに

すでに述べたように、この時期は、基本的に校舎建設にあたって国からの補助金が出るということはなかった時代であった。そのため、校舎は地方公共団体や寄付金によって建てられており、その設備には各地域の経済状況が反映されやすかったものと考えられる。今回の研究を通して、最低限求められた設備や、福岡県内でも格差が大いにあったことなどが明らかとなった。これまでの『骨肉』研究で向野家が経済的に恵まれていたことは明らかにされているが、加えて、地域としても恵まれていたこ

とが、校舎という観点からも明確になった。また、堅一によって家庭教育が充実していた向野家の子どもたちは、学校設備にも恵まれていた可能性が高いことも指摘できる。今後は、設備だけでなく学校教育そのものの実態も明らかにしていきたいところである。

【画像出典】

図1 田代小学校創立百周年記念誌編集委員会『田代のあゆみ』(田代小学校創立百周年記念事業実行委員会、昭和五十二年)四九頁

図2 雷山小学校百周年記念会『雷山』(雷山小学校百周年記念会、昭和五十一年)一五頁
(平成二十四年二月十日受理・茨城大学大学院教育学研究科生)

向野堅一記念館の存在意義

向野康江

向野堅一顕彰会は、いかなる人も拒絶しない方針である。拒絶しないからこそ、あえて記念館の存在意義について語っておきたいことがある。これから述べることに反論があるのならば、どうか、この会報に投稿してほしい。

戦争というものが、いかに悲惨なものであるかはよく知っている。が、経済的、宗教的な問題として思想の相違、感情のぶつかり合いは必ずある。人間の生存欲は尽きず、経済戦争は今も続いている。有利に生存したいという本能が

ある以上、闘いは避けられない。避けられないが、命を奪うのが一番いけないのである。

近年、昭和四十二年(一九六七)向野堅一の長男・晋が再編した『向野堅一日清戦役従軍日記』の後付けとして収録されている「三崎山の追想 大正十三年九月二十三日三崎山三十年大祭当時於金州民政署楼上向野堅一 追想談として金州民政署河野占男氏速記稿」をもとに、日本が一方的に非難される形で「旅順事件」が取り上げられている。私はその取り上げ方に大いに不満がある。なぜ山地將軍が老人、婦女、子どもを除く虐殺を命じたのか、その理由を取り上げようとはしないで語るからである。堅一の言葉を抜粋しておく。

其レカラ和尚島(今ノ柳樹屯)ハ第一軍全隊デ之ヲ打チ敵兵ハ全部旅順ヘト逃ゲマシタ。我軍ハ五日間金州で休ミ更ニ旅順攻撃ニ移ツタノデアリマス。余談ニナリマスガ旅順デ山路將軍(ママ、速記者あるいは晋の転記ミスか?以下同)ガ非戦闘員ヲモ捕ヘテ惨殺シタト云フコトガ当時新聞デ大分ヤカマシクナッタコトガアリマシタガ是レハ旅順戦ノ初メ我ガ騎兵斥候隊約二十名ガ旅順ノ土城子デ捕エラレ隊長中敵中尉ヲ初メ各兵士ハ皆首級ヲ切り落サレ且ツ其ノ瘡口カラ石ヲ入レ或ハ鞆丸ヲ切斷シタルモノモアリ甚ダシキハ顔ノ皮ヲハギ机上ニ飾ルト云フ実ニ言語ニ絶スル惨殺ノ状ヲ目撃セラレタ山路將軍

ハ大イニ怒リ此ノ如キ非人道ヲ敢テ行フ国民ハ婦女老幼ヲ徐ク全部剪除セヨト云フ命令ガ下リ、旅順デハ実ニ惨又惨、旅順港内恰モ血河ノ感ヲ呈シマシタ。

旅順ヲ包圍セラレタ敵兵ハ逃路ヲ失ヒ死物狂ヒトナリマシテ再ビ金州方面ヘ逃走シテ来マシタノデ当時金州ハ僅カニ二個大隊ノ守備兵デ非常ノ苦戦ヲシテ之ヲ撃退シマシタ。

殺された日本兵士の遺体があまりにも無惨だったから、山地將軍は怒り心頭に達したのである。これは死生観の違いによる。

漢族は人肉を食べる。捕虜や処刑者の肉を食べていた。凌遲の刑では処刑者の肉を生きたままそぎ落とす。この記録は文化大革命のときまで続く。凌遲刑の史料は記念館にもある。現地の者か敵兵かが日本兵の屍を「言語に絶する惨殺の状」にしたとしても、それは慣習に従っただけなのかもしれない。しかし山地將軍はそういった漢族の風習を知らなかったのではなからうか。日本人の深層意識には仏教観が根付いている。首は跳ねても、死ねばいかなる者も仏として弔う。四ツ足の動物を食べるときも、なるべくならその姿を連想したくない。京料理などはまさにそうだ。

山地將軍は、日本兵の遺体が無惨に傷つけられているのを見て激怒した。かの「脱亜論」を唱えた福沢諭吉も金玉均が凌遲刑にされ、漢江

のほとりに晒されたとき大いに怒り、日清戦争を「文明と野蛮の戦い」と呼んだ。あの福沢諭吉でさえそう怒った。山地將軍ならばなおさらのことである。ところが堅一は、肉を殺ぎ取ったかもしれない現地人に対して「実に惨又惨」と同情的である。堅一は日中の死生観の違いを知っていたのであろう。相互の死生観を知っていれば、旅順事件は避けられたのかもしれない。そう堅一は思ったか否かはわからないが、原爆を投下したアメリカのように、日本兵が圧倒的な軍力で虐殺したわけではなく、「旅順を包圍せられた敵兵は逃路を失ひ死物狂ひとなりまして(中略)当時金州は僅かに二個大隊の守備兵で非常の苦戦をして之を撃退しました」とある。堅一の旅順事件の回顧録の一部分を切り取って、あたかも日本が悪の如く、山地將軍を悪の如く語っていたきたくないのである。『向野堅一日清戦役従軍日記』の全文を読めば、日本軍が現地人を保護しているのがわかる。

時代は動く。いずれ向野堅一記念館も取り壊され、新しい建物になるかもしれない。保管物を守るために決断する日も来よう。そのとき保存派との間で摩擦が生じるかもしれない。戦争もそのような国家間の摩擦から生じている。平和で誰もが笑って暮らせる世の中がよいに決まっているけれども摩擦は起こる。摩擦が起こるからこそ、摩擦の原因になった事柄をよく検証する必要がある。それが歴史を知るといこう

とではないのか？

賛否は別として今日賠償の論争となつてい
る歴史問題、すなわち満州事変から敗戦までの
十五年間を一つの視点で見ようとする「十五年
戦争史観」で、モノを論ずるならサンフランシ
スコ条約の内容ぐらゐ読んでおくべきだし南
京虐殺事件を主張するなら、通州事件のことぐ
らい知っておくべきで、従軍慰安婦の存在もあ
らゆる角度から検証すべきであろう。

国家の個人への賠償を考えると、まずシベ
リア抑留によって亡くなった人々のことを考
えさせられる。なぜ私の大叔父はシベリアで強
制労働させられ、かの地で死んだのか？なぜ堅
一の友人・染谷保蔵氏は民間人でありながら獄
死しなければならなかったのか？憤慨しても
我々はシベリア抑留への賠償や、染谷氏の無実
投獄の賠償請求はできない。戦争は国家と国家
の政治的問題であり、個人の問題ではないと割
り切るしかない。要は命をうばう戦争というも
のをあらゆる努力で避けるべきである。

堅一もアジアの平和を願った。アジアの平和
のために日本が強いことを願ったのである。戦
時中の皇国史観の蔓延る真只中で、教育界も日
本の勝利を願って精一杯教練に励んだ。ただ、
状況を縦軸と横軸で捉える術を知らなかった。
我々は未来を託す子どもたちには、公平な視点
に立った平和への方法論を教えるべきである。

歴史を研究するプロならば、右派、左派の双

方の言い分を読んでいただきたい。その論は好
き、あの論は嫌い、最初から拒絶するのは己が
無知であることの証明である。私は左派の故大
江志乃夫でも、右派の小林よしのりでもその両
者の著書を読む。その上で自分の見解を述べる。

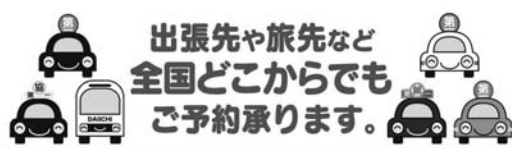
向野堅一研究は、子孫にとつて楽しいもので
はない。堅一の苦悩に満ちた文章を読めば悲し
みに満ちている。それでも挑もうとするのは、
その時代をその時を生き抜いた人々の姿を感
じ取り、後世に伝えたいからである。正確に伝
えたいがために、歴史を縦軸と横軸において理
解したいと願っている。そのための時間が必要
で、すぐにまとめることができないでいる。

歴史を語るときに、己の都合のよい部分だけ
を切り取って語れば、到底真実に行き着くこと
はない。歴史研究では、新しい事実が発見され
れば、研究者は自分の見解を改めなければなら
なくなる。本多寛尚氏が秦巖に関する新見解を
発表すれば、戸籍簿原文に則った私の「下村源
次郎＝秦巖」説は崩れる。が、私はそれを恐れ
ない。むしろ喜ばしいことと思う。そうやって
歴史の事実については、さまざまな角度から検
討がなされて、はじめて、客観性を持つ見解へ
と進む。進めるべきなのである。よって、本記
念館はいろいろな人が出入りし、多種多様な意
見をぶつけ合う場所になればよいと願う。

堅一の漢詩を読めば、西欧に怯むことなく、
アジアを愛する心が滲み出ている。向野堅一記

念館は、日清・日露戦争で亡くなった人々に哀
悼を捧げ続けた堅一の思いを伝える記念館（祈
念館）であると思っている。

(平成二十四年二月一日受理・茨城大学准教授)



出張先や旅先など
全国どこからでも
ご予約承ります。

【全国タクシー予約センター】

0120-382-333

第一交通産業グループ DAI CHI



かてのしわと
しわをあわせて
しあわせ
なうむー

しあわせ少女 ゆうかちゃん

お仏壇の
はせがわ

福岡本社 福岡市博多区上川端町12-192

0120-763-976

発行 向野堅一顕彰会事務局
事務局 〒822-0017 福岡県直方市殿町12-19
向野堅一記念館
編集 向野堅一顕彰会研究部
印刷 BRIHK ブリック
〒939-8214 富山県富山市黒崎 232-2